

書名：ヘンリ・ライクロフトの  
私記

著者：ジョージ・ギッシング

訳者：平井正穂

出版社：岩波書店

出版年月：1961年1月

総ページ数：300ページ

ISBN：400322471X



推薦者

太田直也

鳴門教育大学大学院教授  
現代教育課題総合コース

本との出会いで重要なのは年齢と環境だと言われる。それはある程度、真実であろう。しかし有難いことに、書物の中には、年齢や生活・読書環境を問わないであろうものも数多く存在する。特に、時の試練を生き抜いてきた古典文学作品や哲学書の中からそのような書を挙げてゆけば、まさに枚挙に暇がない。そこで「私の一冊」としては、現在の若者にはあまり読まれていない、しかし読みやすい古典的書物を挙げることにしたい。

『ヘンリ・ライクロフトの私記』はどのような年代の読者にも深い感動を与え、一度読めば何度も手に取ることになる小説だと称されている。作品の主人公ヘンリ・ライクロフトは貧しい文筆家であったが、人生の晩年に至り偶然にも友人の遺産を相続し、ロンドンを去りデヴォンシャーで悠々自適の生活を送ることとなる。彼がそこで記した窮乏生活の思い出や日々の雑感がこの『私記』である。

私自身は大学3年生の時に初めて読み大いに心を揺さぶられたのであるが、後に辻邦生がこの小説を絶賛していることを知り、その意外さに少しばかり驚いたことを思い出す。辻は高名な作家・大学教授ではあったが、文学に関しては自分とは違う方角を向いている人だと思っていたからである（愚鈍な大学院生が大先生に対して、何と偉そうに構えていたことであろう）。辻と私とは親子ほどの年齢差があり、文学についての趣味も異なるし、育った時代や環境、境遇なども勿論違う。どうやらこの小説が形而下の様々な事柄を超越した魅力を持っているということは確かなようである。

この小説の魅力のひとつは、繊細な筆致をもってなされる美しい四季の描写であるが、言うまでもなく季節の移ろいは人生の流れをも示しており、それがゆえにあらゆる世代の読者を魅了するのである。読者が人生のどの段階にあっても、その人自身の過去・現在・未来の姿が作品の中に描かれており、読み返すたびに人生について新たな発見とより深い理解を得ることができるのである。

自然描写とともに読者を惹きつけてやまないのは、ライクロフトの文学や書物に対する想いであり、私がゆくりなく思い出すのは、貧困生活の只中にありながら文学への揺るぎない情熱と信念をもって生きるライクロフトの姿である。現代はもはや文学作品から生き方を学ぶ時代ではないと言われる。だが、読みの過程において、あるいはその結果として、人間存在とその有りようを考えさせない文学作品というものがあるのだろうか。勿論、優れた文学作品といえども、万人が納得する明確な答を与えてくれるわけではないし、そもそもそのようなものは存在しないのだろう。ただ、『ヘンリ・ライクロフトの私記』において一貫して述べられる「自らに対する誠実さ」は、われわれの心を打つばかりではなく、生きる意味を考えさせてもくれる。これは紛れもない事実である。本書が今なお世界中の書棚に佇んでいる最大の理由はここにあるだろう。

